

よい年でありますように ～年末年始の生活からの学びを～

五年生の学級通信に、担任の先生が示唆に富んだお話を紹介されています。年末年始を控え、「子どもの体験」について他の学年の皆様にも是非ご一読いただきたいと考え、以下に紹介させていただきます。

*** 早稲田大学増山均教授の講演会より ***

「なぜ、体験学習なのかということ、体験することで、労働の大変さを想像する力を養うことができる。想像力が豊かになると、周囲の人々の気持ちが分かるようになる。生産や労働の中では、共感する力を得ることができるが、消費に流れると、それらはできなくなる。現在、家庭とその周りから生産的労働が消えてきた。昔、子どもは遊びより先に手伝いをしなければいけなかった。生産的労働が知恵や工夫を働かせ、真剣勝負の生産労働の中で、父母や祖父母が苦勞することを観察することができなくなってきた。こうした変化によって生き生きとした言語が失われ、実感（重み）のある言葉が消えてきた。今でも親は汗水流して働いているのだが、見せることができなくなった。生活の重みを子どもに伝えることができなくなった。」

昭和24年度から37年度頃の旧小学校それぞれの文集を読ませていただきました。増山教授の「真剣勝負の生産労働」「生活の重み」に関して地域の祖母、祖父母の世代は、正月前後の生活を次のように綴っています。「山へ木出しにいきました。境村から一里半もある所まで山に入って馬車のなる所まで木を出しました。山は雪、一面にありました。ぼくも小さい木を引っ張りました。(S24:小2)」「今日は1950年の元日です。.. わかぜたちも一緒に餅焼きをしました。焼きながらお正月の餅も食べられないかわいそうな人が日本にもまだまだたくさんいるんだろうなあ、早く住みよみみんなが楽しめるような日本になりたいなあと思いながら..。(S24:小4)」「なわないや なぞ掛け合って面白い(S24:小5)」「雪降れば どの家でも 肥ひきだ(S24:小5)」「肥え引きで馬は田んぼを急ぎ行く(S24:小4)」「痛む手をじっとこらえて今日こそはと 母に遅れず縄をなう我(S24:小6女)」「縄なって 貯金が増える冬休み(S24:小6男)」「学校の式場には、大きな日の丸の旗が飾られ、ぱっと目だって見えた。式が終わると、お祝いのみかんを二つずついただいて帰った(S32:5年)」昭和30年代の文集には、旧八幡町や旧平田町榎橋の市の賑わいや、正月準備のあわただしさや新年を迎える人々の様子が生き生きと描かれています。昭和33年度の酒田の子ども創刊号には1年生が「田んぼにいて、いねをしょいました。かきをもいでいきました。うまをひっばっていきました。とうさんとうんぱんしゃをひっばりました。」とかいています。捕まえたドジョウやナマズを夕飯のおかずにした2年生の作文、地引網を引くお手伝いをする3年生、松前に出稼ぎに行った両親と弟を思いやる優しさと寂しさ、「6年生は激しい吹雪に包まれながら、1年生を囲んでいきます」



文集には、今では聞くことのない行事や慣わし、仕事も記述されています。「実感(重み)のある言葉」がたくさんあります。戦後から復興期にかけて、「真剣勝負の生産労働」に関わらざるを得なかった子ども達。決して裕福な環境ではなかったけど、心は豊かでたくましかった子達は知恵や工

夫を働かせながら、経済成長を担う世代となって、地元や各地でそれぞれの居場所を支える存在となります。しかし、近年本地区でも、第一次産業従事者の高齢化や減少化が進行する中、父母や祖父母と同じ場で汗を流す機会も減少してきました。子ども達の生活は、次第に「消費」する立場に向かっているのでしょうか。児童に労働を無理強いすることは許されませんが、家族の一員として、「貢献している大切な存在」であることを互いに実感できる機会があってほしいと願っています。それは、将来の「労働すること」や「18才選挙権の行使」の意義について、体験し想像しながら学ぶ場としての家庭の大切な役割でもあります。

正月に家族や親せきが集まり、子ども達も一緒になって、トランプやすごろく、福笑いをする家庭はどのくらいあるのでしょうか。クリスマスやお年玉で得たゲームに、各々の子が浸りきってはいないでしょうか。クリスマスプレゼントを「お金」にする例もあるとか。きれいなリボンを解いて包み紙を開く瞬間のわくわく感も経験できないまま、親になっていくのでしょうか。年末年始の家族や地域の姿は、子どもにとっても貴重な経験です。年末年始ならではということ子ども達にたくさん経験させてください。地域の独自の文化の担い手としての育ちができるのは、唯一地域・家庭での直接経験の力が大きいからです。よいお正月を。。

おべんとうが いっぱい

～希望ステージ エピソード～

希望ステージではたくさんの方から楽器の運搬や映像記録、山台設営など、ご協力をいただき、ありがとうございました。また、会場でのご声援も、子ども達の大きな励みとなったと思います。二中の生徒達も児童席に座って、後輩達の歌声を温かい思いで聴いてくれました。フィナーレでは、平田小代表のS君が「今までで一番上手かったと思います」と発表しました。この言葉は、お世辞抜きの本心だったと確信しています。これもひと



えにご家族の皆様のご理解とご協力の賜物と、重ねて御礼申し上げます。また、第二中学校の歌や演奏は、本校の先輩方が、平田小の子ども達を温かく思いやる心にあふれていましたし、お手本とすべき中学生として、憧れの気持ちを抱かせる姿を見せてくれました。中学生にとっても、先輩としての自覚と自己有用感を十分に感じ取れる場面だったと思います。これも大事な小中連携のひとつだと思います。

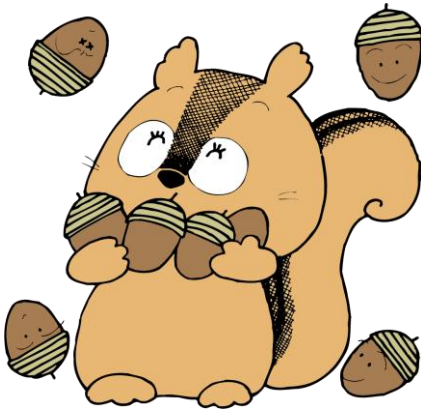
さて、演奏前の昼食はロビーに広げられたブルーシートに座ってみんなで食べました。子ども達が期待感を持ちながらお弁当を広げる瞬間のわくわくした顔や大きな口をあけてぱくぱく食べている顔を見るのが大好きです。「こうちょうせんせ〜、〇〇ちゃん、キャラ弁だよ〜」と教えてくれる子がいました。「ミニオンだよ〜。」食べ物でほっぺを膨らませながら、得意そうな表情でピンクの弁当箱を見せてくれました。中には、目玉焼きをひとつ目に見立てた「ミニオン」の顔がありました。



「手伝ってあげようか？」いつも私は子ども達に言っています。「お手伝いしてほしい人？」「食べられない人はお手伝いをしてあげるから、遠慮しないでいいんだよ〜。」1年生の子も「お手伝い」の意味が分かって、すぐに「だめ〜」と言ってお弁当を私から遠ざけようとしています。お家の人が持たせたお弁当を本当に大事にしているんだなと思うと、うれしくなってきます。家族の人と子ども達の温かな関りや思いを想像しながら、私も幸せな気持ちを勝手におすそ分けしていただいています。

私が中学校の時は牛乳だけの給食で、弁当や途中の店で買ったパンなどを持っていきました。中学校に入学して最初の昼食の日、母が持たせたのは、ハンカチで包んだおにぎりとおかず箱でした。他の子は真新

しいアルマイトの四角い弁当でした。みんなが黙々と食べている中、私だけが、ニヤニヤしながらおにぎりをほおばっていたのでした。実は、母から「あと何日か待って。お父さんの給料が入ったら、すぐ買うから」と言われていたのです。実家は商売をしていたのですが、両親とも働きに出ていました。それで、私も小2の時から学校を帰ってから店番をしていたので、我が家は裕福な家庭でないことは子どもながらに分かっていま

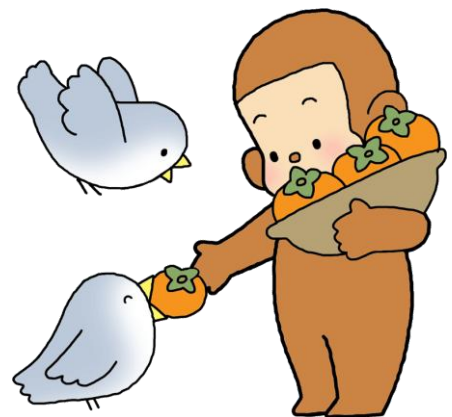


した。中学入学に向けて学生服や鞆などはそろったのですが、弁当箱は後回しになったのでした。そんな訳で、おにぎりになったのですが、ニヤニヤしていたのは、うれしいからではなく、照れ隠しだったように思います。数日後、アルマイトの四角い弁当箱を持っていくことができました。不思議なことに、その日から、自分もニヤニヤすることなく、周りと同じように、不機嫌そうな顔で黙々と弁当を食べるようになりました。自分が、給食時の同級生と同化している事を実感しながら「弁当箱を持ってくと自然に不機嫌そうに黙々と弁当を食べられる自分て、なんか不思議だなあ。」と、弁当一つで変化する自分を再発見した記憶があります。しばらくして、弁当箱には、ご飯ではなく、ポテトサラダを

挟んだ食パン2つの日が続くことになりました。母が入院することになったからです。4つ下の3年生の弟は、朝、パンでも食べていけば、給食を食べられます。自分も途中の店でパンを買うこともあったのですが、退院の予定日が延びたために、自分で弁当を作らざるを得なくなりました。一番簡単なのは、サンドイッチです。部活後に帰宅してから、毎日中町のスーパーに通いました。ポテトサラダが量り売りされていて、毎日同じ量のポテトサラダを毎日同じ店員のお姉さんから買ってきました。「買い置きできる環境」になかったのかもしれない。翌朝パンにはさんで、弁当箱に入れました。それで、アルマイトの弁当箱は、食パン2枚がぴったりと納まる大きさだったことが始めて分かりました。昼食時に弁当箱の蓋を開けると表れた二つの真っ白なサンドイッチと、毎日笑顔で接してくれた、スーパーのやさしい店員さんのことは今でも忘れません。客観的にはあまり明るい思い出ではないかもしれませんが、でも、なぜか暗い思い出とは感じないのです。

その後母は退院して、中学高校と母の作った弁当を持って学校に通いました。時には早弁したり、親不孝なこともいろいろありましたが、「弁当」と聞くだけで何か特別な感情がこみ上げてくるのは、様々な思い出があったからかもしれません。そのためか、子ども達が弁当の蓋を開ける前の顔やあけた瞬間の顔、その移り変わりの表情を見るのが大好きです。「手伝うぞ～」と言った時に「いやだ～」と言ったり、隠したりする子ども達の心の中に、家族が作ったお弁当に込められた思いを大事にしていることがうれしくもあり、うらやましくもあるのです。全ての家庭が子どもが満足できるお弁当を作れるわけではありません。中身が豪華がどうかではなく、「希望ステージがんばれ」という思いや、お家の人への感謝の気持ちを持てる関わりをしていただければ幸いです。コンビニのお弁当を弁当箱に詰め替えるなど、直接調理したものでなくても、お家の人のおいしければ大丈夫です。お弁当をきっかけに、どんな風に子どもと関り、どんな言葉で送りだしてくれたのが大事です。安心してください。「手伝ってもいいよ～」と言ってくれた子は誰もいなかったことが、その証拠です。

たった一人だけ、最後の最後にデザートのみかんを一房分けてくれた1年生の子がいました。よっぽど悲しそうで哀れに見えたのかも知れません。翌週の全校朝会時に1年生の子達の前に立っていると、ある女の子が「こうちょうせんせい、こんどお弁当を持ってくる日があったら、少しあげるね」と誰にも聞こえないようなひそひそ声でこっそりと話してくれました。今年度、弁当をもって来る日はもうないけど、陽だまりにいるような、ほんわかした気持ちをいただいて、お腹も胸もいっぱいになりました。



「ありがとう。でも、大事なお弁当をとったりしないから、安心してお腹いっぱい食べてね。。。」